



玉木新雌と陶工達が、丹波の伝統に火を灯す。



ひょうご
フィールドパビリオン

tamaki niime × 丹波焼最古の登窯焼成

2025年11月25日（火）12時～27日（木）焼成完了まで

共催：tamaki niime・Satoyakuba

協力：丹波立杭陶磁器協同組合

後援：兵庫県



tamaki niime は素材となるコットン栽培から手掛ける「純粋な国産」のものづくりを行っています。現代の日本では「純粋な国産」の作品をつくることの難しさを実感している中、「丹波焼」は地元の土で、地元の薪で火を焚べ、地元の人が脈々と受け継ぎながら、純粋な国産のものづくりが出来る。とても素晴らしいことだと思います。今回の登り窯活用の取り組みから、丹波と西脇が連携を図り、ここでしか出来ない体験をより多くの方に届けていけるきっかけになればと思います。

tamaki niime 代表 玉木新雌

丹波の登り窯

やきものの生産は現代で生き残るために機械設備や経営の近代化を行わざるを得ない状況にあるが、その中でも現在知られる丹波焼の登り窯は、江戸時代に導入が始まったと考えられている。形態は、他産地にもみられる階段状で、壁で部屋を区切る連房式登窯よりさらに古い形式とされるスロープ状で隔壁をもたない柱で部屋を区切る窯である。

現在この形式の窯は他産地では見られず、この窯を使用した作陶技術は、丹波焼の最も大きな特徴である。戦後すぐに行われた京都大学の総合調査でも「今では日本のどこにも見られなくなった大きな登窯を使用して行われる独特の製陶技術であり、かつ、他地域では見られない特殊な構造が現存しており、現在も焼成を続けていることに非常に価値がある」と記されている。



丹波焼最古の登窯

(兵庫県有形民俗文化財)

丹波焼の現存する最古の窯は、明治28年に造られた。山の勾配を利用して長さ 47メートルにわたって築かれ、9袋の焼成室を持っている。経年劣化が激しく平成26年度より2か年大修復に取り組んだ。

※丹波篠山市「陶の郷」を中核とした丹波焼の郷文化観光拠点計画」より

